

令和4年木造建築士試験

試験場	受験番号	氏名
	—	

問題集

学科Ⅲ（建築構造）

学科Ⅳ（建築施工）

次の注意事項及び答案用紙の注意事項をよく読んでから始めて下さい。

〔注意事項〕

- この問題集は、学科Ⅲ（建築構造）及び学科Ⅳ（建築施工）で一冊になっています。
- この問題集は、表紙を含めて14枚になっています。
- この問題集は、計算等に使用しても差しつかえありません。
- 問題は、全て五肢択一式です。
- 解答は、各問題とも一つだけ答案用紙の解答欄に所定の要領ではっきりとマークして下さい。
- 解答に当たっての留意事項は、下記の(1)及び(2)のとおりです。
 - 適用すべき法令については、令和4年1月1日現在において施行されているものとします。
 - 地方公共団体の条例については、考慮しないものとします。
- この問題集については、試験終了まで試験室に在室した者に限り、持ち帰りを認めます。
(中途退出者については、持ち帰りを禁止します。)

学科Ⅲ（建築構造）

〔No. 1〕 木造建築物に作用する荷重及び外力に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 短期に生じる力を計算する場合には、一般に、積雪時、暴風時、地震時を想定する。
2. 常時における長期に生じる力は、固定荷重又は積載荷重によって生じる力のいずれか大きいほうとする。
3. 積雪荷重は、原則として、積雪の単位荷重に、屋根の水平投影面積及びその地方における垂直積雪量を乗じて計算する。
4. 住宅の居室における床の積載荷重は、一般に、「地震力を計算する場合」より「床の構造計算をする場合」のほうが大きい。
5. 粘土瓦葺の屋根の固定荷重は、厚形スレート(プレスセメント瓦)葺の屋根の固定荷重に比べて大きい。

〔No. 2〕 木造建築物に作用する地震力及び風圧力による水平力に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 地震層せん断力係数は、建設地における地震地域係数、建築物の弾性域における固有周期、地盤の性質などによって求まる係数である。
2. 建築物に作用する地震力は、各階が支える荷重を考慮して求める。
3. 軒やけらばに作用する風圧力は、一般に、屋根面に作用する風圧力より大きい。
4. 屋根葺材を軽量化すると、建築物に作用する風圧力は小さくなる。
5. 風圧力は、建築物の形状、高さ及び建設地域を考慮して求める。

〔No. 3〕 木造建築物における部材の名称とそれを使用する部位等との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 広小舞 ————— 屋根
2. 妻梁 ————— 軸組
3. 吊束つり ————— 床組
4. 親柱 ————— 階段
5. まぐさ ————— 開口部

〔No. 4〕 木造2階建ての建築物における基礎又は地盤に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。ただし、基礎については構造計算を行わないものとする。

1. 基礎断熱工法を採用したので、床下換気孔を設けなかった。
2. 地盤の長期許容応力度(地耐力)を設定するため、計画された建築物の中央及び四隅付近の5箇所において、地盤調査を行った。
3. 基礎の上にねこ土台(パッキン)を設けたので、土台の全周にわたって、1m当たりの有効換気面積が 30 cm^2 となるようにした。
4. 地盤の長期許容応力度が 15 kN/m^2 であったので、基礎杭を採用した。
5. 基礎杭を鋼管杭としたので、杭の肉厚は、6mm以上、かつ、杭の直径の $\frac{1}{100}$ 以上とした。

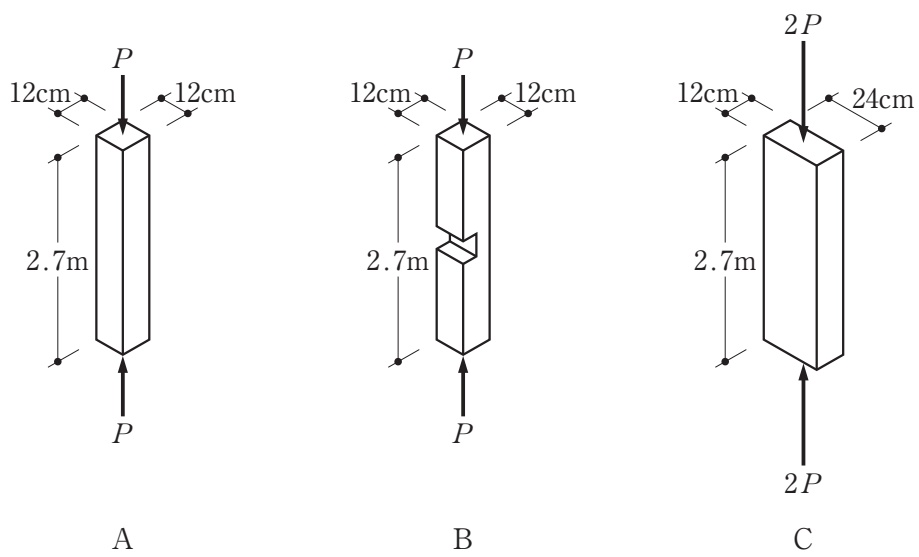
〔No. 5〕 木造軸組工法による2階建ての建築物において、土台又はアンカーボルトに関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 柱の断面寸法を $120\text{ mm}\times 120\text{ mm}$ としたので、土台の断面寸法を $120\text{ mm}\times 120\text{ mm}$ とした。
2. アンカーボルトの設置には、位置出しをするために基礎の型枠に固定する補助材を用いた。
3. アンカーボルトのねじ部は、損傷、錆の発生、汚損を防止するために、布、ビニルテープを用いて養生した。
4. アンカーボルト(M12)のコンクリートへの埋込み長さを、260mmとした。
5. 土台継手の下木の端部に、アンカーボルトを設置した。

〔No. 6〕 木造軸組工法による2階建ての建築物の柱又は横架材に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 2階建ての建築物における隅柱は、上下階の管柱相互をホールダウン金物等で適切に補強すれば、通し柱としなくてもよい。
2. 添え柱は、大きな荷重を受ける小屋梁や2階の床梁の取付け箇所の補強に用いられる。
3. 柱の小径は、横架材間の垂直距離、建築物の用途、規模及び重量等を考慮して決定する。
4. 床梁のせいは、建築物の使用上の支障が起こらないことを構造計算によって確かめない場合には、梁の支点間距離の $\frac{1}{12}$ より大きくする。
5. 鉛直荷重により曲げを受ける床梁は、その中央部付近の下側に圧縮応力が生じる。

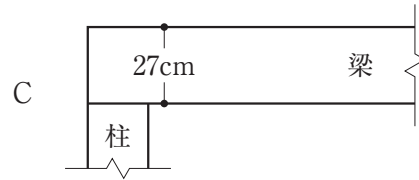
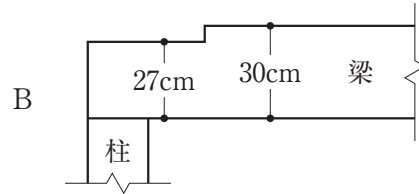
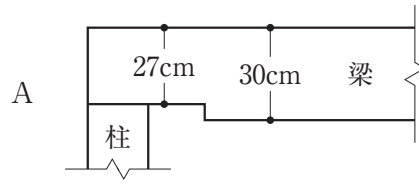
[No. 7] 図のような両端から荷重を受ける木造の柱A、B及びCの座屈のしにくさの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、全ての柱の材質、支持条件は同一とし、荷重は断面の図心にかかるものとする。



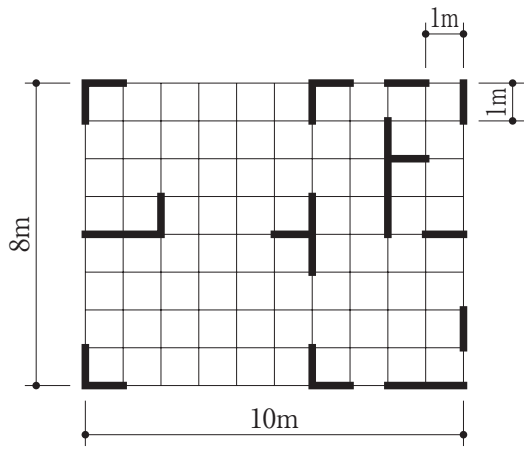
1. $A > B > C$
2. $A = B = C$
3. $A = C > B$
4. $B = C > A$
5. $C > B > A$

[No. 8] 図のような木造の梁A、B及びCの端部におけるせん断強さの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、全ての梁の材質及び幅は同じものとする。

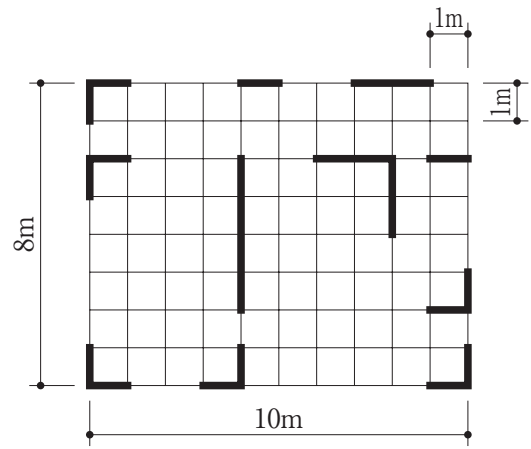
1. $A = B > C$
2. $B > A > C$
3. $B = C > A$
4. $C = A > B$
5. $C > A > B$



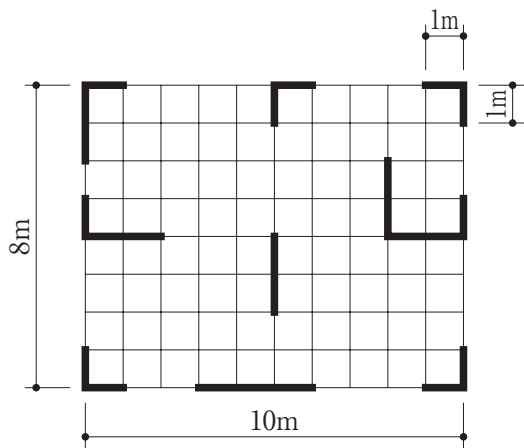
[No. 9] 木造軸組工法による平家建ての建築物において、図に示す平面の耐力壁(図中の太線)の配置として、最も不適当なものは、次のうちどれか。ただし、屋根は日本瓦葺(地震力に対する必要壁率は 15 cm/m^2)とし、全ての耐力壁の倍率は1とする。



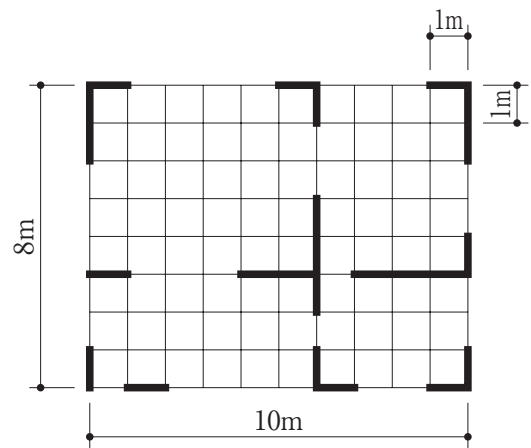
1.



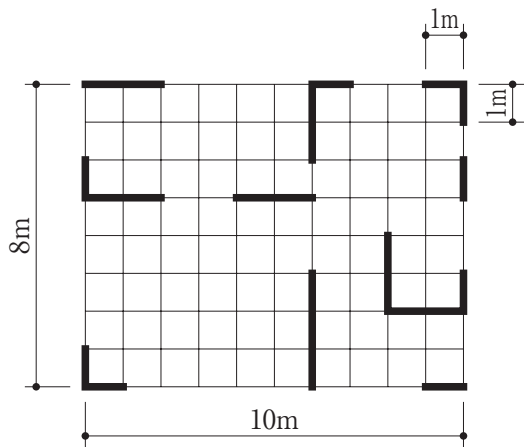
2.



3.



4.



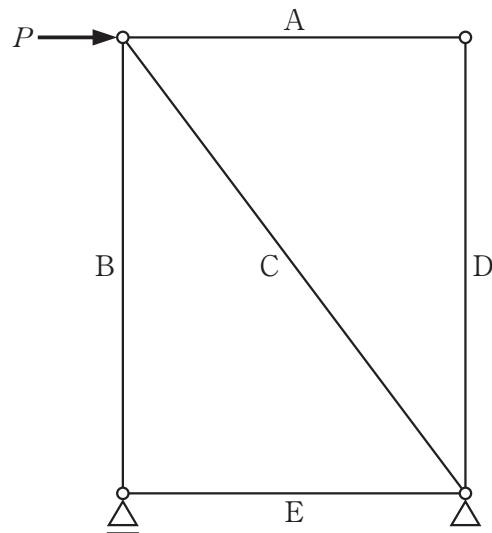
5.

[No. 10] 木造軸組工法による2階建ての建築物の耐力壁に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. たすき掛け筋かいを配置した倍率4.0の軸組の外壁面に、倍率2.5の仕様で構造用合板を釘打ち張りしたので、この耐力壁の倍率を6.5として存在壁量を算出した。
2. 2階の耐力壁の両端部を支えるように、その耐力壁の両端部の直下に、1階の柱を配置した。
3. 耐力壁線相互の距離が8m以下となるように、各階の平面を計画した。
4. 1階及び2階の上下同位置に構造用合板を釘打ち張りした耐力壁を設けたため、胴差部において、構造用合板相互間に6mmのあきを設けた。
5. L字形の平面形状を有する建築物であったので、その平面を二つの長方形の区画に分割し、それぞれの区画で必要な壁量を満足するように耐力壁を配置した。

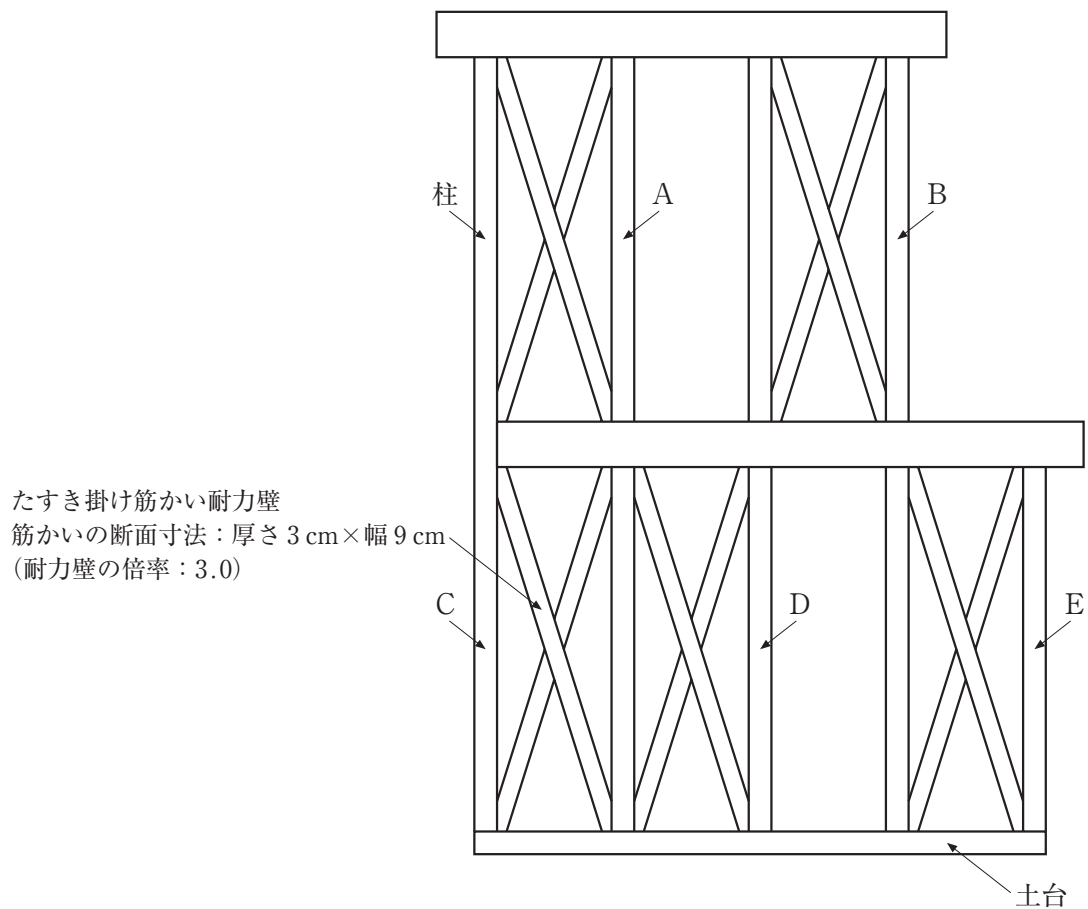
[No. 11] 図のような水平力 P が作用する軸組の部材A～Eについて、部材に生じる軸力に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

1. 部材Aには、軸力が生じない。
2. 部材Bには、引張力が生じる。
3. 部材Cには、圧縮力が生じる。
4. 部材Dには、圧縮力が生じる。
5. 部材Eには、軸力が生じない。



[No. 12] 図のような2階建ての木造建築物の耐力壁の配置において、水平力を受けたときに柱A～Eの脚部に生じる引抜き力が最も大きいものは、次のうちどれか。ただし、図中の各部材の接合部には、必要な金物を使用されているものとし、たすき掛け筋かい耐力壁はいずれも倍率を3.0とする。

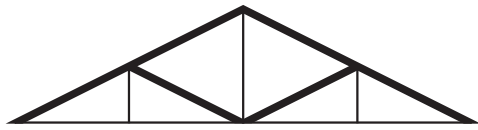
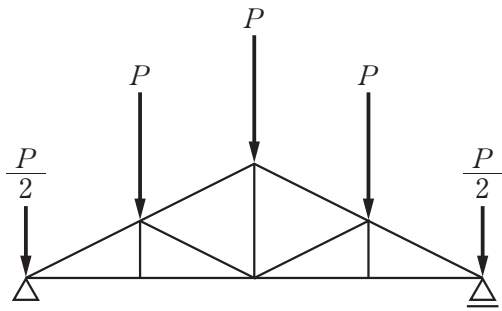
1. A
2. B
3. C
4. D
5. E



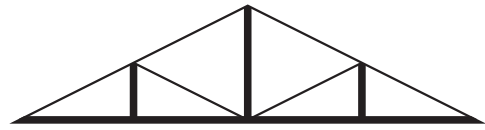
[No. 13] 木造建築物の小屋組に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 折置組は、柱のない位置で小屋梁を支えることができるので、住宅に用いられることが多い。
2. 張り間及び桁行に入れる雲筋かいは、小屋組の変形を防止するために用いる部材である。
3. 洋小屋は、トラス構造であるので、和小屋と比べてスパンの大きい建築物に対応しやすい。
4. さす組は、2本の斜材と小屋梁等で三角形の骨組を構成する小屋組である。
5. 東立て小屋組は、小屋梁の上に小屋束を立て、棟木・母屋などを支える小屋組である。

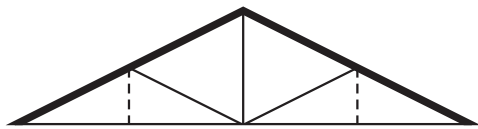
[No. 14] 図のような荷重が作用する洋小屋組において、部材に生じる軸力を示すものとして、正しいものは、次のうちどれか。



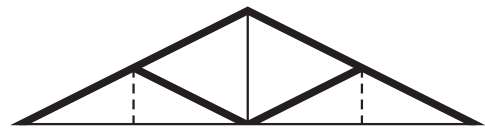
1.



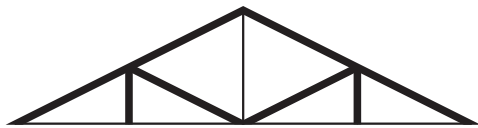
2.



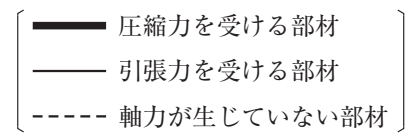
3.



4.



5.



〔No. 15〕 木造軸組工法の建築物の2階床組の根太を用いない工法に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 床梁の間隔を、1.82 mとした。
2. 床梁を受ける柱又は横架材との仕口に、羽子板ボルトを用いた。
3. 下地板に使用する構造用合板の厚さを、24 mmとした。
4. 下地板の構造用合板は、その四周を床梁等の横架材に、N75 釘を用いて 150 mm以下の間隔で平打ちして固定した。
5. 床梁と直交する構造用合板の継目部に、断面寸法 90 mm×90 mmの受け材を設けた。

〔No. 16〕 枠組壁工法による2階建ての建築物に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。ただし、構造計算は行わないものとする。

1. 屋根を構成する垂木相互の間隔を 455 mmとし、屋根下地材として、厚さ 9 mmの構造用合板を用いた。
2. 建築物の内部の耐力壁として、枠組壁工法による耐力壁と木質接着複合パネルによる耐力壁を併用した。
3. 耐力壁線に設ける開口部の幅をそれぞれ 4 m以下とし、かつ、その幅の合計を当該耐力壁線の長さの $\frac{3}{4}$ 以下とした。
4. 径 12 mm、長さ 400 mmのアンカーボルトを 2 m間隔に配置し、かつ、建築物の隅角部と土台の継手部分に配置した。
5. 耐力壁に使用する下枠及びたて枠として、日本農林規格に規定されている寸法型式 204 に適合する枠組壁工法構造用製材を用いた。

〔No. 17〕 木造軸組工法による2階建ての建築物の構造計画等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 敷地が軟弱な地盤であったので、建築物に配置する耐力壁の量を増やした。
2. 吹抜けを有した建築物の2階の壁量計算用の床面積は、2階の床面積に吹抜け部分の床面積を加えたものとした。
3. 建築物の外周に接して吹抜けを設けたので、その部分の胴差の断面を大きくした。
4. 柱、筋かいの地面から高さ 1 m以内の部分について防腐薬剤を現場で塗布した。
5. 平面的な剛性分布のバランスの指標である偏心率が 0.3 を超えるように、耐力壁を配置した。

〔No. 18〕 木造軸組工法による2階建ての既存建築物の耐震性を向上させる方法として、一般に、最も効果の低いものは、次のうちどれか。

1. 2階の床の吹抜け部分に、新たに鋼製の火打梁を設置した。
2. 無筋コンクリート造の布基礎であったので、これに鉄筋コンクリート造の布基礎を抱き合わせて補強した。
3. 耐震補強に当たり、必要耐力を低減するために、既存モルタル外壁の上にサイディングを張る計画とした。
4. 耐力壁が設置された下屋の屋根下地材を、小幅板から構造用合板に張り替えた。
5. 足固めのない玉石基礎であったので、地盤面上に一体の鉄筋コンクリート造の底盤を設け、足固め・金物等を用いてその底盤と柱脚部とを緊結した。

〔No. 19〕 木造建築物の各部における鉛直荷重による力の流れとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 1階床荷重(束立て床)
床板 → 根太 → 大引 → 床束 → 東石
2. 2階床荷重(組床)
床板 → 根太 → 小梁 → 大梁 → 胴差 → 柱
3. 2階天井荷重
天井板 → 野縁 → 野縁受 → 吊木 → 吊木受 → 小屋梁
4. 屋根荷重(和小屋寄棟)
野地板 → 配付け垂木 → 母屋 → 隅木 → 小屋束 → 飛梁 → 軒桁
5. 屋根荷重(洋小屋)
野地板 → 垂木 → 母屋 → 合掌 → 陸梁 → 敷桁 → 柱

〔No. 20〕 木材の一般的な性質に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 木材は、板ガラスに比べて熱を伝えやすい。
2. 木材の接線方向、半径方向及び繊維方向の強度の比は、1 : 2 : 20程度である。
3. 木材の接線方向、半径方向及び繊維方向の乾燥収縮の比は、20 : 10 : 1程度である。
4. ある一定以上の荷重を継続して木材に加えた場合、時間の経過とともに変形が増大する。
5. 木材の断面が大きいと、燃焼部分に形成される炭化層により、燃焼速度は、深部に進むほど遅くなる。

〔N o. 21〕 木材の一般的な強度に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 木材のせん断の基準強度は、樹種によって異なる。
2. 「製材の日本農林規格」における甲種構造材は、主として圧縮性能を必要とする部分に使用する目視等級区分構造用製材である。
3. 長期の積雪時の構造計算を行う場合については、木材の繊維方向の長期許容応力度を割り増しする。
4. 木材の曲げの基準強度は、区分及び等級が同じ場合、すぎの構造用製材よりひのきの構造用製材のほうが大きい。
5. 浴室など常時湿潤状態にある部分に使用する製材の許容応力度は、通常の数値を低減したものとする。

〔N o. 22〕 木材の防腐及び防蟻に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. ヤマトシロアリは、一般に、乾燥した木材を食害するので、被害は建築物の小屋組まで達することがある。
2. 木材の耐腐朽性や耐蟻性は、一般に、辺材より心材のほうが高い。
3. 外壁をモルタル塗り仕上げとする場合の軸組の腐朽防止には、外壁通気構法が有効である。
4. 木材の腐朽菌は、酸素、温度、水分及び栄養素の全ての条件が満たされた状況下で繁殖する。
5. 床下の防蟻措置において、薬剤による土壌処理を行う場合、布基礎部分周辺及び束石の周囲に行うことが有効である。

〔N o. 23〕 木質材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 特定対称異等級構成集成材は、ラミナの品質の構成が中心軸に対して対称であり、かつ、曲げ性能を優先したラミナ構成とした集成材である。
2. パーティクルボードは、木材の小片と接着剤とを混合して成形・熱圧したものである。
3. 木質接着成形軸材料は、木材の単板を積層接着、又は木材の小片を集成接着した軸材である。
4. MDF(ミディアムデンシティファイバーボード)は、主に木材などの植物繊維を成形した繊維板である。
5. OSB(オリエンテッドストランドボード)は、切削機械により切削された単板の繊維方向を互いにほぼ平行にして積層接着したものである。

〔No. 24〕 鉄筋コンクリートに関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 常温時におけるコンクリートの線膨張係数は、鉄筋の線膨張係数とほぼ等しい。
2. コンクリート中に、一定以上の塩化物が存在すると、鉄筋が錆びる原因となる。
3. コンクリートは、打ち込み直後に凍結すると、強度が低下する。
4. 鉄筋は、一般に、炭素鋼の一種である硬鋼でつくられている。
5. 鉄筋のかぶり厚さは、火熱やコンクリートの中性化の影響が鉄筋に及ばないように、値が定められている。

〔No. 25〕 建築材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. アルミニウムは、アルカリに弱いので、コンクリートに直接埋め込んではいない。
2. 大理石は、耐酸性・耐火性に優れている。
3. 溶融亜鉛めっき鋼板は、耐食性に優れているので、屋根材等に用いられる。
4. 陶器質のタイルは、吸水率が高いので、一般に、内装タイルとして用いられる。
5. けい酸カルシウム板は、耐熱性に優れているので、内装材、耐火被覆材に用いられる。

学科Ⅳ（建築施工）

〔No. 1〕 建築工事に関する申請・届とその提出先との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 建築工事届 ————— 都道府県知事
2. 完了検査申請書 ————— 都道府県知事
3. 道路占用許可申請書 ————— 道路管理者
4. 道路使用許可申請書 ————— 所轄警察署長
5. 分別解体等の計画 ————— 都道府県知事

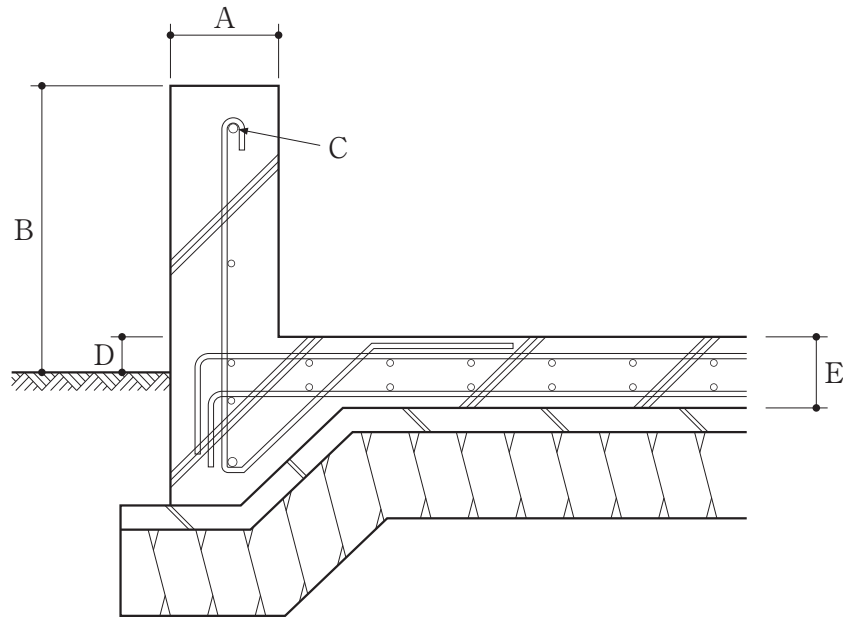
〔No. 2〕 木造2階建て住宅の建築工事現場における仮設工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 遣方の水杭の頭は、衝撃によるゆがみを容易に発見できるように、矢はずに加工した。
2. ベンチマークは、2箇所以上設けて、相互にチェックできるようにした。
3. 足場板については、長手方向に支点の上で重ね、その重ねた部分の長さを30 cmとした。
4. 架設通路の勾配が25度であったので、踏棧その他の滑り止めを設置しなかった。
5. ブラケット一側足場の建地の間隔を1.8 mとし、建地間の積載荷重の限度を150 kgとした。

〔No. 3〕 木造2階建て住宅における土工事、地業工事等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 砂利地業に使用する砂利は、粒径のそろった砂利ではなく、砂混じりの切込み砂利を使用した。
2. 割栗石は、一層小端立てとし、隙間のないように敷き詰めた。
3. 敷地が比較的良好な地盤であったので、割栗地業ではなく碎石地業とした。
4. 軟弱な地盤を補強するため、捨てコンクリートを打設した。
5. 捨てコンクリート地業に使用するコンクリートは、特記がなかったので、設計基準強度を 18 N/mm^2 とした。

〔No. 4〕 木造住宅のべた基礎において、図中のA～Eとその一般的な寸法等との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。



1. A (立上り部分の厚さ) ————— 150 mm
2. B (地上部分の立上り高さ) ————— 400 mm
3. C (立上り部分の主筋の径) ————— D13
4. D (基礎スラブ面の地上高さ) ————— 50 mm
5. E (底盤の厚さ) ————— 100 mm

〔No. 5〕 木造住宅における木材の一般的な使い方に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 室内の床仕上げに用いる縁甲板は、木裏を上にして使用した。
2. 外壁の柱は、室内側を腹にして使用した。
3. 鴨居は、木裏を上にして使用した。
4. 棚板は、木裏を上にして使用した。
5. 梁は、背を上にして使用した。

〔N o. 6〕 木材の木取りとそれを使用する部位との組合せとして、最も不適當なものは、次のうちどれか。

1. 二方桁材 ————— 長押
2. 四方桁材 ————— 間柱
3. 杢目材 ————— 天井板
4. 板目材 ————— 敷居
5. 心持ち材 ————— 土台

〔N o. 7〕 木造軸組工法の施工順序として、最も不適當なものは、次のうちどれか。

1. 竿縁天井
回り縁 → 稲子 → 天井板 → 竿縁
2. 小屋組
小屋梁 → 小屋束 → 母屋 → 棟木
3. 1階床組
土台 → 大引 → 床束 → 根がらみ貫
4. 建方
軸組の建込み → 仮筋かい → 建入れ直し → 本筋かい
5. 階段
側桁 → 踏板 → 蹴込み板 → 手摺

〔N o. 8〕 木造軸組工法における部材と使用する樹種との一般的な組合せとして、最も不適當なものは、次のうちどれか。

1. 鴨居 ————— スプルース
2. 棟木 ————— ベイツガ
3. 胴差 ————— ベイマツ
4. 筋かい ————— ヒノキ
5. 土台 ————— ラワン

〔No. 9〕 木造2階建て住宅における合板等の施工に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 内装仕上げにおいて、構造用面材を使用するに当たり、特記がなかったので、ホルムアルデヒド放散量の等級が「F☆☆☆☆」のものを使用した。
2. 構造用面材を柱、梁等以外の部分で継ぐに当たり、受材の断面寸法を45mm×100mmとした。
3. 大壁造の面材耐力壁には、厚さ9mmのJASに適合する構造用パネルを使用した。
4. 床下地板には、厚さ18mmのJISに適合するパーティクルボードを使用した。
5. 大壁造の面材耐力壁には、厚さ9.5mmのJISに適合するせっこうボードを使用した。

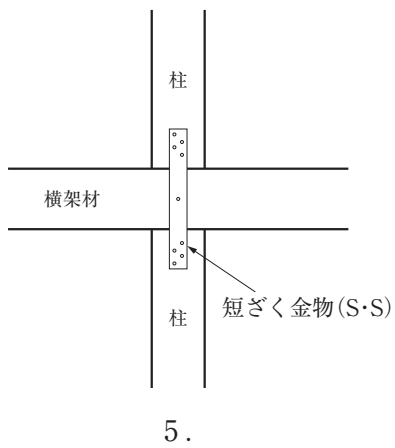
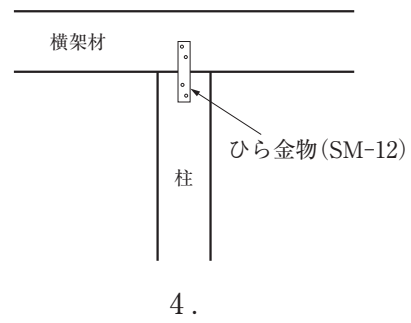
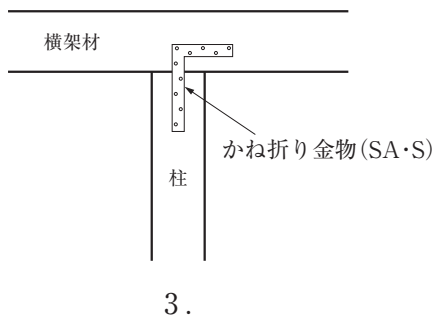
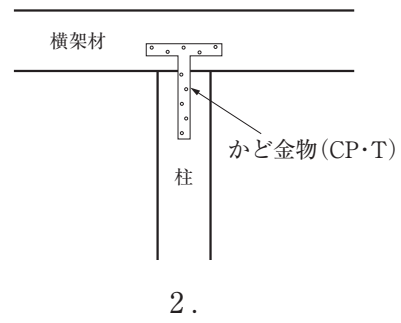
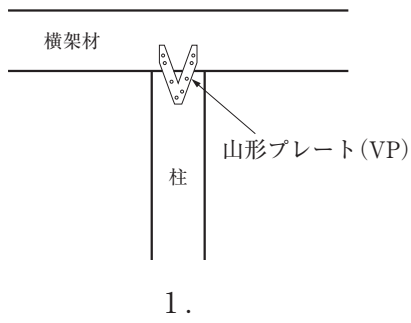
〔No. 10〕 木造軸組工法における各部材の接合部に用いられる継手とその名称との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 胴差 ————— ^{いすか} 鴟継ぎ
2. 土台 ————— 腰掛け鎌継ぎ
3. 母屋 ^{もや} ————— 腰掛け蟻継ぎ
4. 柱の根継ぎ ————— 金輪継ぎ
5. 根太 ————— そぎ継ぎ

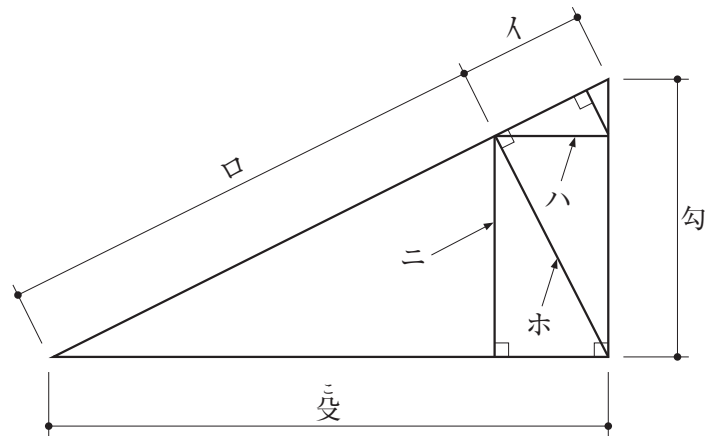
〔No. 11〕 木造軸組工法における各部材の接合部に用いられる仕口とその名称との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 土台T字部 ————— 傾ぎほぞ差し
2. 通し柱と胴差 ————— 傾ぎ大入れ短ほぞ差し
3. 寄棟隅取合い ————— ねじ組
4. 小屋梁と軒桁 ————— 大入れかぶと蟻掛け
5. 土台切れと柱 ————— よりほぞ差し

[No. 12] 木造軸組工法における柱と横架材の仕口に使用されている金物の名称として、最も不適当なものは、次のうちどれか。



[No. 13] 規矩基準勾配図における線分イ～ホとその名称との組合せとして、誤っているものは、次のうちどれか。



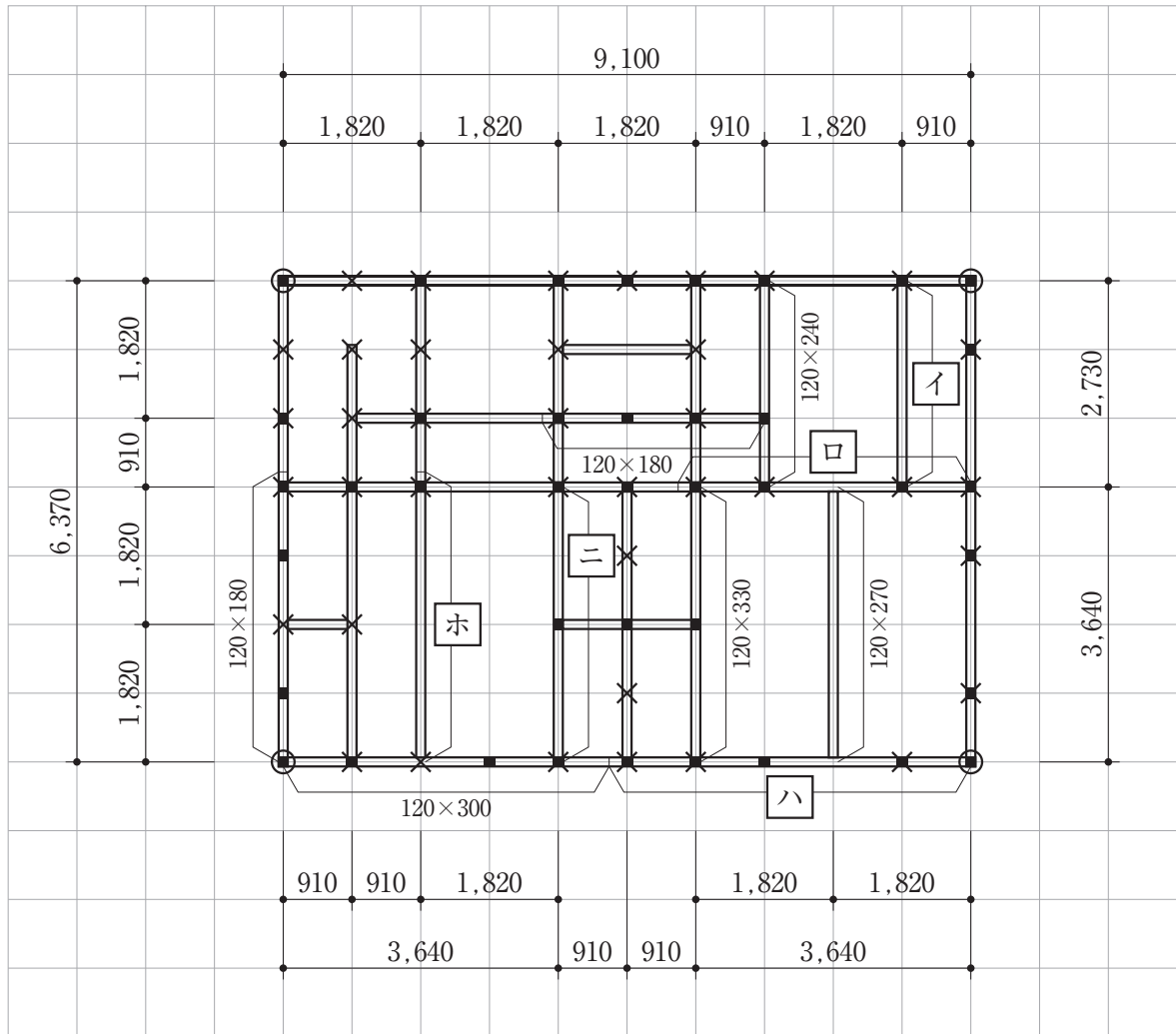
規矩基準勾配図

1. イ ————— 短玄
2. ロ ————— 長玄
3. ハ ————— 小^こ勾
4. ニ ————— 欠勾
5. ホ ————— 補玄

[No. 14] 規矩術における勾配に関する次の組合せのうち、最も不適当なものはどれか。

1. 隅中勾の勾配 ————— 隅木の山勾配
2. 半勾配 ————— 隅木の落掛かり勾配
3. 平勾配 ————— 隅木の勾配
4. 隅欠勾の勾配 ————— 投げ墨
5. 中勾の返し勾配 ————— 鼻隠しの向こう留め

[No. 15] 図のような木造2階建て住宅の2階床伏図において、部材イ～ホとその断面寸法(幅mm×せいmm)の組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。ただし、建築物は多雪区域以外の一般地域内に建つものとし、根太及び火打梁の表示は省略している。また、添え梁(枕梁)等はないものとする。

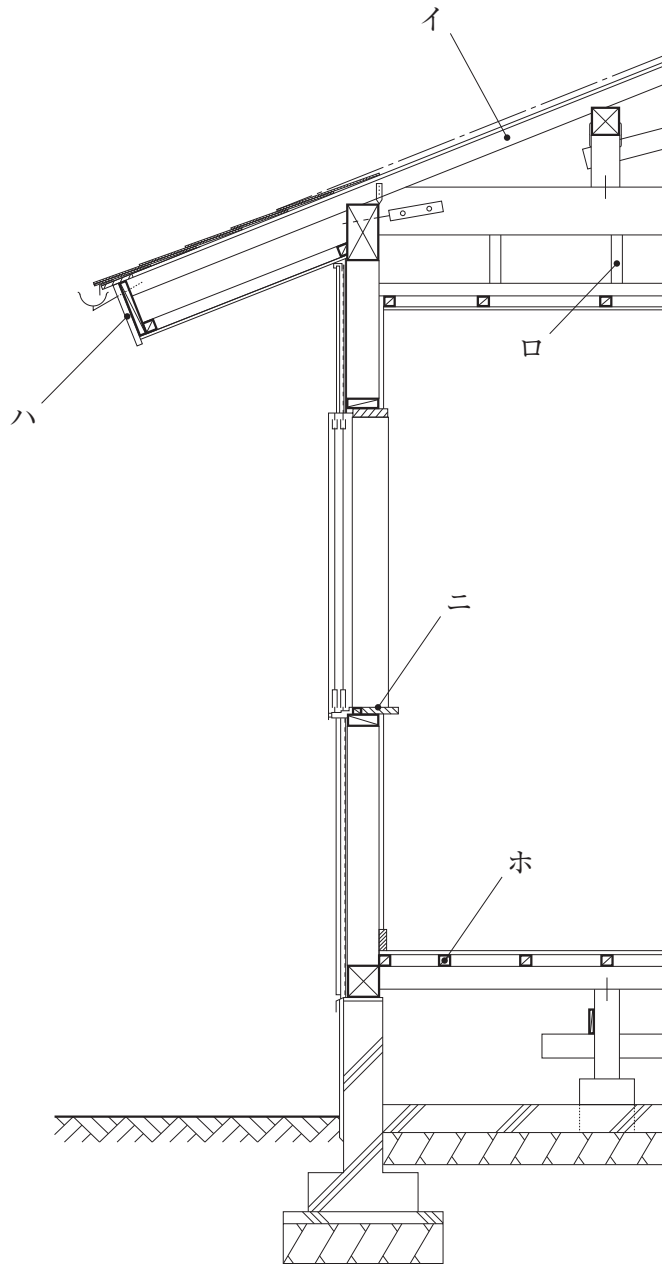


(単位：mm)

凡例	表示記号	通し柱	1階の管柱	2階の管柱	1階と2階が重なる管柱	胴差・2階床梁	
						(正角材)	(平角材)
		●	×	■	⊗	—	—

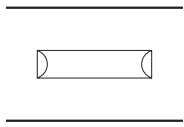
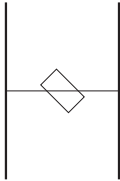
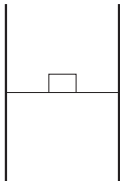
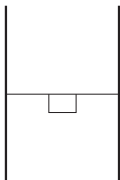
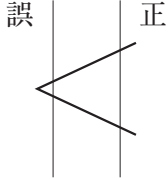
1. イ ————— 120 × 210
2. ロ ————— 120 × 240
3. ハ ————— 120 × 360
4. ニ ————— 120 × 330
5. ホ ————— 120 × 270

[No. 16] 図のような木造軸組住宅の矩計図における部材イ～ホの名称として、最も不適当なものは、次のうちどれか。



- 1. イ ————— 垂木
- 2. ロ ————— 吊木
- 3. ハ ————— 鼻隠
- 4. ニ ————— 窓台
- 5. ホ ————— 根太

[No. 17] 木工事における部材の墨付けに使用する合印とその名称との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

	合 印	名 称
1.		包込みほぞ孔印
2.		間柱心印
3.		鴨居下端印
4.		敷居上端印
5.		にじり墨印

〔N o. 18〕 木造住宅における防水工事及び屋根工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. アスファルトルーフィングの谷部における張り方は、谷底から左右に一枚ものを先に増張りし、その上に左右に重ね合わせ、谷底から 250 mm以上伸ばした。
2. バルコニーの床防水で、防水層の立上がり高さは、外部開口部の下端で 120 mm以上、それ以外の部分で 250 mm以上とした。
3. バルコニーの排水ドレインが、やむを得ず 1 箇所しか設置できなかったため、オーバーフロー管を設けた。
4. 屋根断熱の工事において、断熱材の室内側に通気層を設けた。
5. バルコニーの手摺壁と外壁との取合い部は、手摺壁の防水紙を外壁の防水紙の裏に差し込み、防水テープで有効に止水した。

〔N o. 19〕 木造住宅における左官工事及びタイル工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 床タイルの張付けは、目地割りに基づき水糸を引き通しておき、隅、角などの要所を押さえながら、通りよく行った。
2. 外壁のモルタル下地ラス張り工法における防水紙の継目は、縦、横とも 30 mm程度重ね合わせた。
3. 外壁のモルタル壁塗り工法における下塗り(ラスこすり)は、ラスを被覆する塗り厚とし、木ごとを用いて下部から上部に向かって塗り付けた。
4. 外壁のモルタル壁塗り工法において、上塗りの塗り厚を 6 mmとした。
5. ラス下地へのしっくい塗りにおいて、上塗りは、中塗りの水引き加減を見計らい、こて圧を十分にかけて塗り付けた。

〔N o. 20〕 木部への塗装工事において通常使用しないものは、次のうちどれか。

1. オイルステイン塗り(OS)
2. ウレタン樹脂ワニス塗り(UC)
3. 合成樹脂調合ペイント塗り(SOP)
4. 耐候性塗料塗り(DP)
5. つや有合成樹脂エマルジョンペイント塗り(EP-G)

〔No. 21〕 木造住宅の建具工事及び内装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 打上げ天井の板そばは、相じゃくりとし、幅割合せとした。
2. 障子は、特記がなかったので、上下棧は^{かまち}框に短ほぞ差しとした。
3. 木製建具の棧や^{かまち}框に用いる材は、心持ち材とした。
4. 木製建具の保管は、格子戸は立てかけとし、フラッシュ戸は平積みとした。
5. 洗面室の床の下地板に、JASに適合する構造用合板の1類を使用した。

〔No. 22〕 木造住宅における設備工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 雨水ますには、底部の泥だめの深さが200mmのものを用いた。
2. 汚水ますには、インバートますを用いた。
3. 給水管には、水道用硬質塩化ビニルライニング鋼管を用いた。
4. 屋外への排水管は、基礎コンクリートに埋設したスリーブ管の中に通して設置した。
5. 給湯用配管は、管の伸縮が生じないように堅固に固定した。

〔No. 23〕 木造住宅の工事における施工機械・器具の使用に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 鉄筋の結束線締めには、ハッカーを用いた。
2. 木材の表面削りには、プレーナーを用いた。
3. 木材の面取りや溝付けには、トリマーを用いた。
4. 木材の孔あけには、ラチェットレンチを用いた。
5. 造作材の溝付けには、ルーターを用いた。

〔N o. 24〕 建築積算に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 所要数量は、定尺による切り無駄や施工上やむを得ない損耗を含まない正味の数量である。
2. 工事原価は、純工事費と現場管理費とを合わせたものである。
3. 複合単価は、材料費や労務費など、二種類以上の費用を合わせたものの単価である。
4. 諸経費は、現場管理費と一般管理費等を合わせたものである。
5. 工事現場における工事中機械の搬出入のための輸送費は、直接工事費に該当する。

〔N o. 25〕 設計図書に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 仕様書は、工事請負契約書類の一部である。
2. 市販の標準仕様書については、建築主と合意のうえで、内容を一部訂正して使用することができる。
3. 現場説明書の内容は、一般に、質問回答書に優先する。
4. 設計図書には、一般に、施工図は含まれない。
5. 設計図面の内容は、一般に、標準仕様書に優先する。

